

長澤勝俊追悼演奏会にあたって

発起人会代表 田村拓男



2008年1月10日に長澤さんが亡くなられて1年が経ちました。

今回、長澤勝俊追悼演奏会開催にあたり、各界より大勢の方々や団体が発起人としてご参加くださったこと、そして多くの演奏家の皆様のご協力により盛大なコンサートが出来ますことを心より感謝いたします。またプログラム作製にあたっては、それぞれの方々より貴重なお言葉を賜り、素晴らしい追悼集になりましたことを大変嬉しく思います。長澤さんもきっと喜び感謝していると思います。有り難うございました。

長澤さん没後、長澤作品やお人柄を慕う全国の合奏団や個人が、それぞれの演奏会で長澤作品を取り上げて追悼演奏を行っています。関西においても総勢80人の方々による「長澤勝俊トリビュートコンサート」が2月15日(日)、兵庫県立芸術文化センターで開かれると伺いました。その実行委員会も、60年代に京都学生三曲連盟、関西学生邦楽連盟に参加し、長澤勝俊とダブらせながら現代邦楽のうねりを呼び込んだ人たちが中心になって組織されているとのこと。当時のメンバーも今や団塊の世代。一つの時代を感じさせてくれます。

本日東京でも、邦楽界に煌めくソリストたちが、そして第一線で華やかに活躍を続ける合奏団らが一堂に会して競演します。ことに最後の「子どものための組曲」は、個人参加のソリストたち45名による合奏であり、歴史的なページとなることでしょう。お聴き逃し(見逃し)のないように篤とご覧頂きたいです。このように長澤作品が、西に東に鳴り響く光景を40数年前に想像出来たでしょうか。

「伝統は創られるもの」といいます。現代がやがて古典となり、古典は継承される。一方創造は続けられるので「伝統の創造」は常に進行形です。

それにしても、この50年間の邦楽界の変遷には目を見張るものがあったといえるのではないのでしょうか。

私たちは、長澤さんから大きな財産と元気を戴きました。大事に受け継ぎたいと思います。

最後に実行委員会の皆さんに感謝いたします。各合奏団より派遣(各2名)された委員の皆さんの行動力とチームワークは素晴らしいものでした。

エピソードを一つ

長澤さんの戸籍謄本には「沢」の字が「澤」と書いてあるのだそうです。今回、直子夫人が区役所、税務署、郵便局などへの諸書類提出の際に厳しい指導を受けられたそうです。長澤さんのお付き合いが始まって50年近くになるのですが全く知りませんでした。冊子「長沢勝俊～音に命を吹き込む…長沢音楽のすべて」にご本人が「長沢勝俊」とサインをしてくれるくらいですから…。人生を鷹揚で徹された長澤さんでもありました。

合掌

長澤勝俊さんを偲んで

廣瀬量平(作曲家)

長澤さんにはじめてお会いしたのは、たしか人形劇団ブークの公演だった。その時以来、長澤さんの温顔はいつも変わらず、当時の私は若気の至りで少し荒々しかったが、近年長澤さんの人徳を感じるようになった。日本音楽集団に私は入団しなかったが、そこでのお仕事も多く見聞した。

しかし一番印象に残るのは、スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」の舞台全曲を作曲されたことだった。今でも忘れられないのは、美濃赤坂の宿で猿之助以下全員が颯爽と踊りまくるシーンである。あの壮大なダンスシーンを書く筆力には瞠目した。

長澤さん、あのエネルギッシュな音楽や暖かい親しみのある音楽はいつまでも人々に愛され続けるでしょう。 冥。

二〇〇八年十月九日



訃音!廣瀬氏が11月24日に逝去されました。奇しくも本日・同時間に京都コンサートホールで「しのぶ会」が行われています。

合掌 田村拓男